

はしがき

カンナダ語は南インドのカルナータカ州の公用語である。日本の約9倍の面積を持つインドは、12億の人口を擁するが、その南部の5州にドラヴィダ系の言葉を話す人々が暮らしている。一番南の東側のタミル・ナード州ではタミル語、その西側のケーララ州ではマラーヤラム語、東のベンガル湾を上がったアーンドラ・プラデーシュ州とテランガーナ州ではテルグ語、そしてその西側の中央部からアラビア海にかけてのカルナータカ州でカンナダ語が話されている。カルナータカ州は日本の半分ほどの面積で、人口は6100万人ほど、その大部分がカンナダ語を話す。

日本語の起源をタミル語にもとめる説なども出たことからわかるように、ドラヴィダ系の言語はその膠着語的な構造が日本語に似ている。インドの北部で話されているヒンディー語やマラーティー語などの言葉はインド・ヨーロッパ語族に属し、ドラヴィダ系の言語とはまったく構造を別にしていて。しかしながら、それらのインド・ヨーロッパ語族の言葉の古い時代の文化的な共通語であるサンスクリット語はカンナダ語の語彙の中にも強い影響を保っている。

サンスクリット語は日本では古くは梵語と呼ばれ、その語彙の一部は、仏教を通して日本語に入っている。そうした古来からのつながりに加えて、近年ではカルナータカ州の州都ベンガルール(バンガロール)はインドのIT産業の中心として「インドのシリコンバレー」とも呼ばれ、日本からの自動車産業の進出の一つの拠点ともなっている。日本人駐在員の人口もデリーについて第2位となっているので、この都市を訪れたことのある日本人の数もずっと増えていることと思われる。

しかし、カンナダ語に限らず広くドラヴィダ諸語について見ると、タミル語と日本語の起源の関係についての議論など様々な話題があっても、わが国における研究はようやく始まったばかりといえよう。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、マラーヤラム語を除くタミル語、カンナダ語、テルグ語の三つの言語の言語研修を1986年から1998年にかけて行ったのは、少しでもその欠落を埋めようとするものであった。しかし現在でも、この言語研修テキスト以外の日本語による書物としては、入門的文法書がタミル語3冊、テルグ語とマラーヤラム語で各1冊あるにすぎない。

このような状況の中で、ここに本格的なカンナダ語・日本語辞典を刊行できることは、両著者の長年にわたる努力の賜物であると同時に、電子出版技術の開発を含む情報処理の側面ですそうした努力を支えてきたアジア・アフリカ言語文化研究所、特に、情報資源利用研究センターと文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」の成果の一端である。

思えば、私がアジア・アフリカ言語文化研究所に奉職した1992年以来、故奈良穀元アジア・アフリカ言語文化研究所教授を代表者とする科学研究費補助金国際学術研究「電算機利用による南アジア諸言語の比較・対照研究」を始めとする様々なプロジェクトで、内田紀彦、ラージャブローヒト両博士と進めてきたカンナダ語・英語・日本語三言語辞書の構築に向けての共同研究は既に20年を越えている。

カンナダ文字と日本語を共に印字することすら困難であった時代であって、カンナダ文字フォントを開発することから、複雑な多言語対照の記述を可能にするデータベース構造の検討、独自文字コードの新聞データからの用例文の収集など、現在の時点ではそれほど困難と思われまいであろうことも、90年代においては多くの創意工夫を必要としたものであった。

多くの先人の業績に基づくと同時に、最新の情報処理技術を用いてもなお、本格的な辞典の編纂には非常に長い時間が必要であり、そうした営みを支える長期的な視野に立つ公的な研究支援なしには、辞書のような知的基盤は容易に実現し得ないことを、多くの皆様に理解していただきたく思う。

本辞典の完成に至るまでの道筋で様々な形でお世話になった方々すべての名をあげることはできない。ドラヴィダ語研究の高橋孝信氏、家本太郎氏、児玉望氏には、インド現地調査においてもお世話になった。同僚ながら、アジア・アフリカ言語文化研究所の町田和彦氏と峰岸真琴氏には多くの学恩を受けた。また、編集の最終段階で様々な点検の労を取っていただいた高崎恵氏、三省堂辞書出版部の皆様、とりわけ編集担当の柳百合氏には心からの感謝を捧げたい。

最後に、長年にわたって報われることの少ない辞典編纂に力を尽くしてこられた二人の著者、B.B. ラージャブローヒト氏と内田紀彦氏、また両氏のご家族の皆様には心からの敬意と、「ご苦勞さまでした」の言葉を贈りたい。

2016年6月10日

高島 淳

この辞典の特色と使い方

1. カンナダ語の辞書の歴史

現存するカンナダ語の辞書の最古のものは、詩人ランナが書いた『ランナ・カンダ』と呼ばれるもので、西暦 996 年の作品とされている。この韻文の作品は、詩人が韻律に合った詩を書くために同じような意味の単語をまとめて列挙した詩作用の辞書である。西暦 1045 年のナーガヴァルマの作品、1300 年頃のヴィッタラのもの、1398 年のアビナヴァ・マンガラージャの作品など、19 世紀に至るまで同様の作品が続いている。^{*1}

詩作のためではない実用のための辞書の歴史は、キリスト教の宣教師によって 19 世紀に始まる。1832 年に、イギリス人の宣教師ウィリアム・リーヴが、『カンナダ語と英語の辞書』を出版した。1858 年にはダニエル・サンダーソンが、その改訂版を出している。さらに、ギャレットの文法書と辞書が 1871 年に、またツィーグラの『英語・カンナダ語スクール辞典』が 1876 年に出版されている^{*2}。こうした努力の後を受けて、ドイツ出身の宣教師キッテルが 1893 年に『カンナダ語・英語辞典』を出版した。これは、19 世紀における比較言語学研究の大きな成果といえる。

印欧語比較言語学研究の進展を追う形で、19 世紀において、南インドの諸言語についての比較研究も進められた。これによりドラヴィダ系語族という理解がもたらされ、1856 年にコールドウェルが『ドラヴィダ諸語比較文法』を出版して基本的な認識が共有されることとなり、キッテルもこうした言語学の潮流をよく理解しつつ研究を進めていた。

その後のドラヴィダ諸語研究における金字塔は、バローとエメノーの『ドラヴィダ語源辞典』(DED 初版 1961)であり、その改訂版 (DEDR) が 1984 年に出版されている。これによって、ドラヴィダ諸語の中の一つの言葉から、他の言語における類縁の言葉へとすばやく検索することが可能となったのである。

1.1 キッテルの辞書

キッテルは、『カンナダ語・英語辞典』を編むに当たって、実用性を越えて学問的な関心から編纂を行った。それまでのすべての辞書を越える数の語彙を含むというだけでなく、古い文語の語彙についてまで収集を行った。当時は、カンナダ語の作品の出版がまだ未熟であったために、写本でのみ手に入るような作品についても対象としている。残念ながら、キッテルが用いた写本の出自については記録に残されていないため、同定するのは現在ではほとんど不可能である。キッテルの用いた大部分の作品が現在では出版されているが、本辞典ではそのような出版作品の形に従うのではなく、あくまでもキッテルの編集方針を尊重した。キッテルの辞書は、1968 年に拡大改訂されて 4 巻本の形で出版されており、オリジナル版と共に本辞典のために活用させていただいた。どちらも研究者や学生にとって、現在もなお極めて有用なものである。

しかしながら、キッテルの辞書を用いるに当たっては、いくつか留意しておかねばならないことがある。キッテルの辞書では、古カンナダ語において **ra** (𑒠) という文字(音素)で表されていたものが現在のカンナダ語で **ra** (ರ) で表されている場合に、**ra** の表記のみを採用し、現在の普通の形である **ra** の表記は採用していない。同様に、現在の表記が **la** (ಲ) となっているものについては、古い形の **ra** (𑒠) の形のみが採用されている。

実例として、「羊」を意味する **kuri** (ಕುರಿ) や、「悪人」を意味する **kūḷa** (ಕುಲ) は、キッテルの辞書には載っていない。読者は、**ra** (ರ) で表されている部分は古カンナダ語においては **ra** (𑒠) であったこと、**la** (ಲ) で表されている部分は古カンナダ語においては **ra** (𑒠) であったことを知っていることを期待されてい

^{*1} 例えば、Nāgavarma's *Ab^hid^hāna Vastukōśa* (1045), Viṭṭhala's *Amarakōśada Ṭiku* (1300 頃), Abhinava Maṅgarāja's *Ab^hinavā-b^hid^hāna* (1398), *Karnāṭaka Śabdasāra* (1400 頃、著者不明) など。

^{*2} さらに 1891 年には、Ullal Narasingarao が *Kisāmwār Glossary of Kannada Words* を出版している。

る。そうした読者は、*kuri* (ಕುರಿ) の代わりに *kuṛi* (ಕುಠಿ) を、*kūḷa* (ಕೂಲಾ) の代わりに *kūṛa* (ಕೂಠಾ) を引いて望みの答えを得ることができる。これらの語のように両方の形が文献から知られている場合には、一方が古形であることはほぼ確実であるが、キッテルは十分な資料のない場合にも、古形と想定できる *ra* (ಠ) や *ṛa* (ಠ) による形(本来なら想定再構築形としてアスタリスク付きの **ra* や **ṛa* で表示すべきもの)を採用していることがある。後で述べるように、本辞典ではそうした例に特に注意を払って処理している。

1.2 カンナダ文学アカデミーの辞典

その後 20 世紀の前半からいくつかの辞書が作られるが³、決定的に重要な辞書となったのは、カンナダ文学アカデミー (Kannāḍa Sāhitya Paṛiṣattu) の辞書である。8 巻からなるこの大辞典 (*Kannāḍa Sāhitya Paṛiṣattina Nig^hamṭu*、以後『アカデミー大辞典』と略記)は、1970 年から編纂が始められ 1995 年に完結した。

ドラヴィダ諸語に共通する特性でもあるが、カンナダ語には同音異義語(わずかに異なった綴り字となるものも含む)が多い。『アカデミー大辞典』と『ドラヴィダ語源辞典』は、意味と語源の分析によって、同一の分類に属すべき語についての区別を注意深く行っている。本辞典では、これら二つの辞典に従って同音異義語の区別を行った。ただし、ごく例外的に、語源的に近接した意味領域に属する語について一つの語として扱ったものがある。

2. 凡例

本辞典の特徴の一つとして、ドラヴィダ祖語からの復原再構築語は採用しなかったにもかかわらず、キッテルの辞書から見出し語を取り込んだことがあげられる。このため、本来なら再構築語のマーク付きで記載すべき単語が、『ドラヴィダ語源辞典』と同様に、そのまま採られている。本辞典では、『アカデミー大辞典』にその語が現れるかを確認して、現れない場合には ⟨i⟩ の記号を付して、おそらくこれらの語がキッテルによる再構築語であることを示した。

このように、本辞典は、コーパスから独自に見出し語を選定するのではなく、既存の辞書から見出し語の選定を行った。語彙の選定の基準としては、カンナダ語学習者、および、カンナダ語やドラヴィダ諸語を対象とする広範な学生や研究者にとって有用であることを目指した。特に『アカデミー大辞典』に依拠している面が多いのは言うまでもない。

しかしながら、『アカデミー大辞典』の用例については、学習者にとって有用な例をあげるという本辞典の目的とは必ずしも一致していないため、本辞典独自の解説も付した。加えて、新聞などの最新の用例の収集に基づいて、わかりやすい用例文をできる限り追加した。

日本人読者のためには、見出し語と共にラテン文字転写の形式も与え、カタカナ表記による発音(カナ発音)と国際音声記号(IPA)を付加して便宜を図った。

2.1 配列と構成

1. カンナダ文字による見出し語に続けて、ラテン文字転写、カナ発音、国際音声記号(IPA)を付した。
2. 見出し語の配列はカンナダ文字配列規則によっている(p. xiv 「カンナダ文字の字母表」を参照)。
3. 発音表記に続けて、同語異綴り語がある場合には、それらをカンナダ文字で表記した。
4. 同じ綴り字で別の見出し語がある場合には、肩付き数字の 1 や 2 などを付して区別した。
5. 主見出し語に加えて、その語から派生した単語を小見出しとして配列した。
6. ドラヴィダ祖語に由来していない場合は、[Sk.] (サンスクリット語)、[Ar.] (アラビア語)、[Pe.] (ペルシャ語)のように、項目の末尾に語源を表記した。
7. 項目説明の中での参照語や文例についても、カンナダ文字表記(ラテン文字転写)の形で示した。
8. 品詞は、発音あるいは同語異綴り字リストの後に *n*. などのように示した(p. viii 「略号 1: 品詞ほか文法事項」を参照)。

³ Shivaram Karant の *Sirigannaḍa Arthakōṣa* (1940)、Gurunath Joshi と Ashvathanarayana の *Kannāḍa Kannāḍa Śabdakōṣa* (1956)、C.E. Kavali の *Sacitra Kannāḍa Kannāḍa Kastūri Kōṣa* (1957)、S. R. Ramarao の *Kannada Kannada English Dictionary* (1965) などがある。

9. 二つ以上の品詞からなる項目については、— で品詞の異なることを示した。
10. 女性形や不規則な過去語幹、その他補足的な文法事項を、必要に応じて()の中に示した。
11. 意味(語義)の記述については、頻度順ではなく歴史的あるいは意味変化が分かるように配列した。したがって、最もよく使われる意味が必ずしも最初に来るようには配列されていない。
12. 単語全体、あるいは特定の意味での用いられ方について、文章語、古語、方言、常用語(口語でも文章語でも普通に用いられる)の区別を示すこととし、無印のものを常用語とした。
13. 外来起源でない本来のカンナダ語を語源とする場合には [Ka.] と注記し、多くの場合『ドラヴィダ語源辞典』による語源分類番号を示した。[Ka. D340] は、『ドラヴィダ語源辞典』の 340 番のカンナダ語の項目にこの単語が掲載されていることを示している。アスタリスクが付いている場合は、ほぼ同形の語はあるが、正確にその形の語がないことを示している。『ドラヴィダ語源辞典』への参照は同様に、[Ta. D340] (タミル語部分)や [Ma. D340] (マラーヤラム語部分)のような形で近縁語への参照を促す場合もある。
14. サンスクリット語の語源については、CDIAL という形でターナーの『印欧語比較辞典』への参照を指示している場合もある。
15. 植物や動物についての記述で、図鑑などの図版を参照して欲しい場合には、文献の略号にアスタリスク * を付けて *[IMP4.257] (= *Indian Medicinal Plants* 第 4 巻 257 頁の図版) のように示した。
16. 用例の出典については、Nn. 51 (Kitt.) (= *Nānārtharatnākara* 51 節) としてキツェルの辞書に出典が記述されている、ということを示している。「略号 2: 出典(言語学・文法・方言など)」(p. ix) に出典の省略形のリストをあげた。ただし、『アカデミー大辞典』を出典としている場合については、原則としてこうした記述を省略した。
17. 見出し語の選択において、『ドラヴィダ語源辞典』のカンナダ語の項目に入っているものはすべて本辞典にも採録した。本辞典の見出しに入っていない単語は、『ドラヴィダ語源辞典』にも入っていない。この点にくわえ、本辞典には『ドラヴィダ語源辞典』の番号への参照もあるので、ドラヴィダ諸語の研究者にとっては有用性の高い辞書となっている。
18. 国際音声記号 (IPA) 表記については、IPA 2005 に準拠している。
19. 例えば、接尾辞 /a/ は /i/ のような母音に続くとき /ya/, /u/ のような母音に続くとき /va/ のように現れるし、日本語の連濁と同様に、複合語において後部要素の語頭子音が /k/ /t/ /p/ の場合に /g/ /d/ /b/ に変化するといった当然の音韻変化について、特に説明していない場合がある。適宜、「発音について注意すべき点」(p. xi)、巻末の「カンナダ語の文法の概要: 1. 連声」(p. 921)の説明を参照していただきたい。

上で部分的に触れたように、カンナダ語の文章や会話の表現においては、様々な位相やヴァリエーションがある。例えば、形式張ったスタイル、くだけた気楽な形式、家庭内での使われ方、文章語の様式などである。これまでの辞書では、こうしたスタイルの相違については記載していない。しかし、特に外国人学習者にとっては、日常的に使ってよい言葉なのか、文章でしか使わないような言葉なのか、といった点について最低限度の指標があることが望ましい。また本辞典では、ドラヴィダ諸語の研究者の便も考えて、現在ではあまり使われない多くの語も見出し語として採用している。以下では、そうした区別の指示やその他の補足的事項について説明する。

- 1) 無印の単語は、口語でも文章語でも用いられ、日常的な場面でも形式張った場面でも、どのような文脈でも問題なく用いることのできる語である。例えば、akki (ಅಕ್ಕಿ 「米」) や nīru (ನೀರು 「水」) のような単語である。しかし、ある単語の特定の意味が特定の状況で使用される場合には、その意味についてだけ、以下の 2 から 9 の区分を示した
- 2) 《古》: 現在では用いられない時代後れの単語
- 3) 《文》: 形式張った表現、あるいは、文章語においてのみ用いられる単語
- 4) 《雅》: 非常に文学的な表現においてのみ用いられる単語
- 5) 《方》: 特定の地方(「略号 2: 出典(言語学・文法・方言など)」)においてのみ用いられる単語
- 6) 《口》: 口語的な表現においてのみ用いられる単語

- 7) 《希》：単語として、あるいは、単語のその意味での使用が稀なもの
- 8) 《異》：最も一般的な綴り字とは異なった(長音が短音などの)表記法で記されている単語
- 9) 《註》：『アカデミー大辞典』に認められていない単語(おそらくはキッテルが再構成したもの)
- 10) 〔書〕：別の見出し語への参照
- 11) 〔汎〕：参照指示において、より汎用的に用いられる語を指示するときに用いた
- 12) 〔口〕：参照指示において、口語的表現で一般的な言葉、特に外来語的な語を指示するときに用いた
- 13) 〔文〕：参照指示において、文語的表現で用いられる言葉を指示するときに用いた
- 14) 〔俗〕：参照指示において、俗語的表現で用いられる言葉を指示するときに用いた
- 15) 〔現〕：参照指示において、古語の項目から現代に用いられる言葉を指示するときに用いた
- 16) 〔稀〕：参照指示において、外来語の使用が一般的で実際にはあまり用いられない語を指示するときに用いた
- 17) ⇒：図への参照
- 18) →：草木の用途が、食物であるか医薬品であるかなどの指示
- 19) 発音が確定できない古語や地方語には、IPA 表記に? を添えた場合がある
- 20) [?] あるいは [<?]：語源が不明であるときに用いた
- 21) < と ←：語源を示す
[M. isamã ←Ar. ism] のように、直接の語源がさらに別の語源に遡るときは原則として ← で示した
- 22) +：語結合を + で示した
- 23) ×：別系統の言語あるいは形の似た言葉などからの影響によって、形の変異などを受けたと考えられる語源については × で示した
- 24) *：存在が確認されていない印(語源における再構築語、あるいは、女性形の文例が確認できない場合など)
- 25) ↔：反対語は、*āṅgaṇa*(前庭)↔*hittala*(裏庭)のように示した
- 26) ()：準名詞と準形容詞の訳語において補う語、および、他動詞の直接目的語を示すために用いた
- 27) ()：補足的文法事項として、女性形や不規則過去語幹などを示した
- 28) ◇：派生語を示した。— は見出し語相当部分を示す。名詞から動詞を派生する場合、*ಮಾಡು* (*māḍu*) 「する」を付けて「…する」を示す場合は自明なので訳語を付けていないが、その他の動詞が付く場合には訳語を示した
- 29) []：訳語の文体や専門分野の表示に用いた
〔婉〕婉曲に 〔タブー〕タブー語 〔敬〕敬語 〔諺〕ことわざ 〔児〕幼児語 〔俗〕俗語 〔罵〕罵り語
〔喩〕比喩的 〔皮〕皮肉 〔美〕美称 〔蔑〕軽蔑的 〔言〕言語 〔歴〕歴史
- 30) ()：語の省略、あるいは、補足説明
- 31) []：語の言い換え
- 32) ¶：各用例の開始
- 33) [Ø]：以下の四つの場合を意味する
- 接尾辞に関してあまり用いられないこと
 - 女性形あるいは男性形が存在しないこと
 - 間投詞であるので語源説明ができないこと
 - 文字の説明で、語頭に来ることが少ないこと

2.2 品詞

品詞の略号については以下にリストを掲げるが(「略号1:品詞ほか文法事項」を参照)、通常はあまり用いられない二つの品詞分類を採用している。(n.)と(adj.)は、それぞれ「準名詞」「準形容詞」を示す。ドラヴィダ系言語は、日本語などと同様の膠着語であり、名詞と名詞が連続すると前に来る名詞は形容詞の働きをする。しかし、形容詞とはいっても、「それは美しい」に相当するような、形容詞の述語としての用法は存在せず、このような場合には「美しい」にあたる形容詞を名詞化して「それは美しいものである」というような語法しか存在しない。ここで準名詞と分類した語は、述語として用いられるときに通常は名詞化されないのが品詞としては名詞であるが、その内容は「性質」を示すもので、形容詞的に用いられることが非常に多い語である。

日本語の形容動詞の語幹、例えば「きれい」を明確に名詞として扱うためには、「きれいさ」のように「さ」を付加しなければならないが、述語としては「それきれい」と言えることにも似て、ドラヴィダ諸語の準名詞は、名詞の前に来るときは直接続く名詞を修飾すると同時に、述語としては形容詞と違って名詞化接尾語を付けないままで形容詞的意味の述語となることができる。

こうした点について、ドラヴィダ諸語には、本来、形容詞が存在せず、通常は形容詞に区分されているものもすべて、本質は名詞であると言われる。一方、カンナダ語の語彙にはサンスクリット語起源のものが多く、サンスクリット語においては、名詞と形容詞の区別が希薄で、すべての名詞は形容詞にもなり得るとも、またすべての形容詞は名詞にもなり得るとも言われる。そうしたサンスクリット語起源の語については、*adj.*, *mf.* などと表記して、どちらの用法もあり得ることを示した。*adj.*, *m.* と表記した場合には、女性形を並記するか、並記していない場合は通常形、すなわち、-aで終わる名詞語尾が-iに変化して女性形を取ることを示している。しかし、そうした語であっても、主な用法が形容詞であった述語としては名詞化接尾辞を取るが、まれには名詞的用法も見られるものについては、「準形容詞」という分類を行った。このように曖昧とも言える分類が行われるのは、カンナダ語の理解が話者のサンスクリット語の教養などに強く依存するためである。

略号1:品詞ほか文法事項

<i>acc.</i>	目的格	<i>honorific pl.</i>	尊敬の複数形(単数の相手に敬意を示す)
<i>adj.</i>	形容詞	<i>ibc.</i>	複合語の始めで
(<i>adj.</i>)	準形容詞	<i>ifc.</i>	複合語の終わりで
<i>adv.</i>	副詞	<i>imp.</i>	命令形
<i>col.</i>	会話的	<i>ins.</i>	具格
<i>com.</i>	普通語(文章語や古語に対比しての指示)	<i>intrj.</i>	間投詞
<i>cond.</i>	条件形(連用条件分詞形としての指示)	<i>loc.</i>	所格
<i>conj.</i>	接続詞	<i>m.</i>	男性名詞
<i>dat.</i>	与格	<i>mf.</i>	男性女性名詞
<i>def.</i>	欠如動詞(否定時制のみであるか、否定時制を欠いている動詞)	<i>mfj.</i>	男性女性中性名詞(子供を含めた人間)
<i>dem.</i>	指示代名詞(これ/あれ)	<i>mim.</i>	模倣語
<i>denm.</i>	名詞派生動詞	<i>mn.</i>	男性中性名詞(女性形は別形、あるいは、伝統的に人間とされたものが現在では物とされる)
<i>dig.</i>	尊称形	<i>mod.</i>	現代の形
<i>echo.</i>	繰り返し表現(わずかに異なった形で語を繰り返して、意味を明瞭にしたり強調したりする方法)	<i>morph.</i>	形態素
<i>f.</i>	女性名詞	<i>n.</i>	名詞(固有名詞も含む)
<i>fut.</i>	動詞の未来語幹	(<i>n.</i>)	準名詞
<i>gen.</i>	属格	<i>neg.</i>	否定時制(定動詞形、連用分詞形、連体分詞形で)
		<i>nom.</i>	主格(後置詞の前で通常の属格や与格ではなく主格の場合)

<i>numr.n.</i>	数詞	<i>snt.</i>	間投詞的発話(サンスクリット語からの場合あり)
<i>numr.adj.</i>	数形容詞	<i>subj.</i>	接続法
<i>obl.</i>	斜格	<i>suf.</i>	接尾辞
<i>onom.</i>	オノマトペ	<i>v.</i>	動詞
<i>p.part./past.p.</i>	連用完了分詞	<i>v.adj.</i>	動詞の連体分詞形
<i>pej.</i>	蔑視的	<i>v.adv.</i>	動詞の連用分詞形
<i>part.</i>	小辞(不活用語)	<i>v.aux.</i>	補助動詞
<i>postp.</i>	後置詞	<i>v.imp.</i>	原則として、実際の主語が与格で示されて三人称で活用する非人称動詞
<i>pref.</i>	接頭辞	<i>verb.participle</i>	連用分詞
<i>pron.</i>	代名詞	<i>vi.</i>	自動詞
<i>pron.pref.</i>	代名詞的接頭辞	<i>vt.</i>	他動詞
<i>redup.</i>	繰り返し(echo. と違ってそのままの繰り返し)		
<i>refl.</i>	再帰的(自分自身あるいはお互いに)		

2.3 出典について

出典などの略号は、キッテルのものについてはそのまま踏襲した。キッテルに拠らないものについては、『アカデミー大辞典』に拠っている。それ以外の略号は、本辞典で参照した新規の参考文献についてのものである。

略号 2 : 出典(言語学・文法・方言など)

A[0-9]+	A12 のように A に番号が続いている場合は、 <i>DEDR</i> (『ドラヴィダ語源辞典』改訂版)の Appendix への参照。
<i>Abhā.</i>	<i>Anubhāvāmṛta</i> , Vicāra darpaṇa mudraṇāśāle, Bangalore, 1874.
<i>Abh.P.</i>	Abhinava Pampa (Nagachandra)'s <i>Rāmāyaṇa</i> , (Manuscript).
<i>AdP.</i>	Ādipurāṇa of Pampa, (Abridged edn.), (Ed.) L.Gundappa, Mysore University, 1956.
<i>AlVc.</i>	<i>Allamana Vacana Candrike</i> , (Ed.) L. Basavaraju, Mysore, 1961.
<i>AmVc.</i>	<i>Akka Mahādeviya Vacanaḡaṛu</i> , (Ed.) Mallabadi Veerabhadrappa, Dharwad, 1956.
<i>Ap.</i>	Ādipurāṇa of Pampa, (Ed.) S.G.Narasimhachar, 1900, (referred to by Mariappa Bhatt).
<i>B.</i>	Bombay, the Department of Public Instruction, Kanarese books. Numbered from 1 to 5, 1882-83.
<i>Bark.</i>	“Barkur Kannada” (<i>LSB</i> , 11.1-8, 1969) and <i>Barkur Kannada</i> , Poona, 1971, by A.S. Acharya.
<i>Bh.</i>	<i>Kumāra Vyāsa's Bhārata</i> , Vichara Darpana Press, Bangalore, 1875.
<i>Bhn.</i>	<i>Bhārata nighaṇṭu</i> , (Manuscript).
<i>BIA</i>	<i>Book of Indian Animals</i> , by S.H. Prater, Bombay Natural History Society, 1980.
<i>Bp.</i>	<i>Basava purāṇa</i> , Bibliotheca Carnātaka, Mangalore, 1850.
<i>Bv.</i>	<i>Basavaṇṇanavara vachanaḡaṛu</i> , Ed. S.S.Basavanal, 1954.
<i>C./com.</i>	より一般的に用いられている語形(Commonly used word)
<i>Āb.</i>	<i>Śabdasaṅgraha</i> , by G. V. Mohare, 1874, quoted by Kittel.
<i>Ā.Bp.</i>	<i>Cannabasava purāṇa</i> , Bibliotheca Carnātaka, Mangalore, 1851, quoted by Kittel.
<i>CDIAL</i>	<i>Comparative Dictionary of Indo-Aryan Languages</i> , by Ralph Turner, Oxford University Press, London, 1962-1966.
<i>Āh.</i>	Nāgavarma's <i>Chandas</i> , (v. means verse number), Basel Mission Press, Mangalore, 1875.
<i>CK.</i>	カルナータカ州中央部(Central Kannada)で話されているカンナダ語
<i>Āpr.</i>	<i>Candraprabha purāṇa</i> , by Arḡaḷa deva (Manuscript), Reference in Kittel's Dictionary, (revised edn. 1968).
<i>Āt.</i>	<i>Caturāsya nighaṇṭu</i> , (Manuscripts, marked as I & II), quoted by Kittel.
<i>Āv.</i>	<i>Channabasavaṇṇanavara Vacanaḡaṛu</i> , (Ed.) R.C. Hiremath, 1965.
<i>DCV</i>	<i>Dravidian comparative vocabulary</i> , (Ed.) R.P. Sethu Pillai et al., University of Madras, 1959.

- DEDR* *A Dravidian Etymological Dictionary*, 2nd edition by T.Burrow and M.B.Emeneau, Clarendon Press, Oxford 1984.
- Dh.* *Dhātuprakaraṇa* of the *Śabdamaṇidarpaṇa*, (Ed.) F.Kittel, Basel Mission Press, 1897.
- D^hvanyālo.* *D^hvanyāloka*, by Ānandavard^hana.
- Dp.* *Dāsapada*, (a collection of *Dāsa* songs from various sources), Bibliotheca Carnātaka, Mangalore, 1850, quoted by Kittel.
- Dr./Pk.* ドラヴィダ語 (Dravidian) / プラークリット語 (Prakrit)
- epigr.* 碑文資料 (Epigraphical document).
- G.* A small Canarese vocabulary by Gaṅgādhara Maḍivāḷēśvara, Bangalore, 1869
- Gai index* Index of *Historical Grammar of Old Kannada*, by G.S. Gai, Deccan College, Pune, 1946.
- Grj.* *Girijākalyāṇa*, Lakshmvilasa Press, Bangalore, 1886.
- Gowda.* *Gowda Kannada*, by K. Kushalappa Gowda, (Annamalai University Department of Linguistics, Publication No.20), Annamalainagar, 1970.
- Gz.* *Gazetteer of the Bombay Presidency*, Vol.XXII, 1884, quoted by Kittel.
- H./M.* ヒンディー語 (Hindi)/マラーティー語 (Marathi).
- Hal.* *Halakki Kannada*, by A. Sriramana Acharya, (Linguistic Survey of India Series, 1), Poona, 1967.
- Hav.* *An Outline Grammar of Havyaka*, by D.N. Shankara Bhat, (Linguistic Survey of India Series, 5), Poona 1971.
- HavS.* *The Havyaka Dialect of North Kanara*, by K.G. Shastri, Dharwar, 1971.
- Hlā.* Ancient Kannada commentary on Halāyudha's *Abhidhānaratnamālā* (Manuscript)
- IHT* 『インド花綴り』西岡直樹著, Tokyo, 2002.
- IMP.* *Indian Medicinal Plants*, (numbers indicate volume number and page number)
- J.* *Jaimini Bhārata*, Bibliotheca Carnātaka, Mangalore, 1848, Kṛṣṇarājaviḷāsa Press, 1861 & 75.
- Jenu Kuruba* "The Jenu Kuruba dialect of Kannada", LSB 4.7-12 (1968) and *Coorg Kannada (Jenu Kurba Dialect)*, Poona, 1971, by U.P. Upadhyaya.
- Jñs.* *Jñānasindhu*, Karnātaka Mudrāksharaśāle Press, Bangalore, 1879, quoted by Kittel.
- Kāv्य.* *Kāvyaḷalōkana* by Nāgavarma (Manuscript), quoted by Kittel.
- Kk.* *Kabbigara Kaipīdi*, (Manuscript), quoted by Kittel; *Kabbigara Kaipīdi*, by Liṅgamantri, Vichāra Darpaṇa Mudraṇakṣara śāle, Bangalore, 1930.
- KKS* *Sacitra Kannaḍa Kannaḍa Kastūri Kōśa*, by C.E. Kavali, Ramashraya Book Depot, 1957
- KPN* Kannada Sahitya Parishat's *Nighantu* (Dictionary of Kannada Sahitya Parishat, in 8 volumes, Bangalore), 1970-1995.
- Kr.* *Kavirāja Mārga*, (Ed.) A. Venkata Rao & H. Sesha Ayyangar, 1930.
- KŚR* *Karnataka Śabda Ratnākara*, by Narasimhashastri Kolanadu, Karnataka Kavya Manjari, Mysore, 1950.
- Kumta* *U.P.U.* を参照
- lex.* (伝統的)辞書から (Lexical)
- LSB* *Linguistic Survey Bulletin*, Pune.
- Lush.* A.W. Lushington, *Vernaculer List of Trees, Shrubs and Woody Climbers in the Madras Presidency*, 2 vols., Madras, 1915.
- M.* *Malayāḷa*, (A Malayalam English Dictionary), by Gundert, Mangalore, 1872.
- Mhr.* Marāṭhī, quoted by Kittel.
- Mr.* Maṅgarāja's *Nighaṇṭu*, (Manuscript), quoted by Kittel.
- MS.* 原稿 (Manuscript)/(MSS. Manuscripts)
- MVa.* *Mōḷige Mārayya Vacanagaḷu*, (Ed.) Chennappa Uttangi and S.S. Bhusanurmah, Dharwad, 1950.
- My.* マイソール方言 (Mysore)
- NK* カルナータカ州北部 (Northern part of Karnataka).
- Nanj.* *Najangud Kannada (Vakkaliga Dialect)*, by U. Padmanabha Upadhyaya, (Linguistic Survey of India Series, 2), Poona, 1968
- Nn.* *Nānārtharatnākara*, (Manuscript)

- Nr. *Nācirācīya*, commentary on Amarakośa, (Manuscript)
- P. *Karnāṭaka Pañcatantraṃ*, by Durgasimha, (Ed.) S.G. Narasimhachar and M.A. Ramanujayyengar, Karnataka Kavya Manjari, Mysore, 1931.
- Pb. Pampa's *Bhārata*, (Ed.) Bellave Venkatanaarappa, 1931.
- Pra.Vā. *Prajā Vāṇi*, daily news paper from Bangalore, dated 2.2.2003.
- Prll. *Prabhuliṅgalilā*, (Manuscript), quoted by Kittel.
- Prv. 諺 (Proverb)
- PS. *Padārtha sāra*, by Māghanandi, Oriental Institute, Mysore, 1953, quoted in KPN.
- R. Rev. W. Reeve's *Carnāṭaka and English Dictionary*, quoted by Kittel.
- Rām. Kumāra Vālmīki's *Rāmāyaṇa*, Vicāra darpaṇa Press, Bangalore, 1881, quoted by Kittel.
- Rām. *Toraveya Rāmāyaṇa*, by Kumāra Vālmīki, (Ed.) H. Ramashastri, Kriṣṇarājavilāsa Press, Bangalore, 1870, quoted by KPN.
- Rśv. *Rājasēkharavilāsa*, (Manuscript & Kriṣṇarājavilāsa Press, Bangalore, 1866)
- Sd. Rev. D. Sanderson's edition of Mr. Reeve's *Carnāṭaka and English Dictionary*, Bangalore, 1858, quoted by Kittel.
- Si. New Interpretation of Amarakōśa by Siddhānti Subrahmanya Śāstri, Bangalore, 1872.
- SK. カルナータカ州南部 (South Karnataka).
- S.Mhr. マラータ地方南部 (South Marāṭhā).
- Śm. Tōṅṭada Arya's *Śabda mañjari*, (Manuscript)
- Śmd. *Śabdamañidarpaṇa*, Basel Mission Press, Mangalore, 1872.
- Śmd.Dh. The list of dhātu (verbal themes) of the *Śabdamañidarpaṇa*, 1897.
- Śs. *Śabdāsāra*, (Manuscript).
- Śśv. *Śabaraśaṅkaravilāsa*, Bellary, C.L.S. Press, 1886 and Grantharatnākara Press, Madras, 1887, quoted by Kittel.
- St. & Pl. *Five Hundred Indian Plants*, by C.Stolz and G.Plebst's, Mangalore, 1881.
- T. Tamil (*A Dictionary of the Tamil and English Languages*, by J.P. Rottler, Madras, 1834), quoted by Kittel.
- Tē. *Telugu-English Dictionary*, by A.D.Campbell & C.P.Brown*⁴, quoted by Kittel.
- Tipt. *Tiptur Kannada*, by A.S. Acharya, (Linguistic Survey of India Series, 8), Poona, 1971.
- U.P.U. U.P. Upadhayaya, *A Comparative Study of Kannada Dialects*, Mysore, 1976. A selection of Items from the Bellary, Gulbarga, Kumta, and Nanjangud dialects.
- UNR Ullal Narasinga Rao, *A Kisamwār Glossary of Kanarese Words*, Mangalore, 1891.
- V. *Vṛṣabhēndravijaya*, Karnatic Press, Bangalore, 1875, quoted by Kittel.
- Vr. *Vaddārādhane*, Ed. D.L.Narasimhaachar, 1959.
- Z. F. Ziegler, *English Kannada School Dictionary*, 1876.

2.4 発音について注意すべき点

インド系の文字は、もともと発音をよく表記できるように作られているので、ラテン文字による転写表記とそれを基に派生させたカナ発音によって、それなりの発音が可能である。より正確な発音のために、国際音声記号(IPA)表記を見出し語の後に示した。なお、綴りがまったく同じ単語でも、サンスクリット語からの借用語かカナダ語固有の語彙かの相違によってわずかに発音が違う場合などがあり、それがIPA表記に反映されている場合もある。

以下に、いくつかの点について注意しておきたい。

1. 無声反り舌摩擦音 *ṣa* (ಷ) [ʃə] は、サンスクリット語の教養がある人はサンスクリット語文法の規定のように発音するが、大部分の人は歯茎硬口蓋摩擦音 [c] として発音する。なお、[s] または [j] のように発音するのは標準的なものではない。
2. 語の末尾の /u/ は、前後の音によって様々に発音され、場合によっては完全な無声となることもある。本辞典での表記は、ゆっくり丁寧に発音されたときの発音を示している。

*⁴ キッテルの記している著者表記。実際のところは、初版の著者は Brown のみである。また第2版は、“by C.P. Brown, 2nd ed., New ed., throughly rev. and brought up to date / by M. Venkata Ratnam, W.H. Campbell, and K. Veeresalingam. Madras 1903” と表記されている。

3. [g] および [k] の前での [e:] は、会話的なカンナダ語においてしばしば、[e:] あるいは [æ] となる。例えば、[e:ke] は [ɛ:ke] と、[he:ge] は [hæ:ge] と発音される。
4. 前舌母音 [i] [i:] [e] [e:] は、渡り半子音 [ɣ] を伴って発音される。例えば、[idu] は [ɣidu]、[ede] は [ɣede] のように発音される。
5. 前舌母音 [i] [i:] [e] [e:] が反り舌の子音 [t, d, n, l, r] に先立つ場合、これらの母音は [i̠] [i̠:] [ɛ̠] [ɛ̠:] のように中舌音化することがある。
6. 語頭の [o] と [o:] は、渡り半子音 [ɣ] を伴って発音される。例えば、[ondu] は [ɣondu]、[o:ta] は [ɣo:ta] のように発音される。
7. [z] と [f] は外来語において現れることがある。例えば、[zaru:r] 「緊急の」や [kāfi] 「コーヒー」など。
8. 複数の発音表記を記している場合には、最初のが丁寧な発音であり、後のものはよりくだけた発音である。例えば、[he:ge] [hɛ:ge] [hæ:ge] 「どのように」など。
9. 摩擦音化したものについて、[ɸ] [g̃] [d̃] のように下付きのリング()で表記した。これらは、本来の摩擦音とは異なる音である。
10. 理論的には、サンスクリット語に由来する気息音 visarga (◌ḥ) は、口蓋音の前では無声口蓋摩擦音 [x]、両唇音の前では無声両唇摩擦音 [ɸ] として発音されるべきものであるが、実際には、後続の子音を重複子音化するものとして発音される。antaḥkaraṇa は antakkaraṇa、antaḥpura は antappura と発音される。本辞典の発音表記もこの慣用に従っている。
11. 母音の発音の短縮を˘によって示した。例えば、[nivəṣəṇe] における 2 番目の [ə] は最初の [ə] よりも短く発音される。

2.5 その他

略号 3：諸言語名

Ap.	アバブランシャ語	M.	マラーティー語
Ar.	アラビア語	Ma.	マラヤーラム語
A.	アッサム語	MIA	中期印欧語
B.	ベンガル語	MI.	マレー語
Du.	オランダ語	NIA	近代印欧語
Eg.	英語	OIA	古印欧語
F.	フランス語	Pa.	パース語
G.	グジャラーティー語	Pe.	ペルシャ語
Germ.	ドイツ語	Pk.	プラークリット語(中期印欧語)
Gk.	ギリシャ語	Pt.	ポルトガル語
H.	ヒンディー(ヒンドスターニー)語	Sk.	サンスクリット語(古印欧語)
IA.	印欧(インド・ヨーロッパ)語	Ta.	タミル語
Jp.	日本語	Te.	テルグ語
Ka.	カンナダ語	Tk.	トルコ語
Lat.	ラテン語	Tu.	トゥル語

2.6 参考文献

- Arya Vaidya Sala Kottakkal, *Indian Medical Plants, A Compendium of 500 species*, (5 vols.), Orient Longman, 1994-1996.
- Belsāre, M.B., *An Etymological Gujarati English Dictionary*, Asian Educational Services, New Delhi, 1981, (First published : 1904) (XI + 1207 pp.)
- Brown, Charles Phillip, *A Dictionary, Telugu and English*, Christian Knowledge Society, Madras, 1852, (xvi + 1303 + xxviii + 131 pp.)
- Burrow, T. and Emeneau, M.B., *A Dravidian Etymological Dictionary*, Clarendon Press, Oxford, 1964, 2nd edition, 1984, (xli + 853 pp.)
- Gundert, H., *A Malayalam and English Dictionary*, reprinted by Biblio Verlag, Osnabruck, 1970 (reprint of the edition, 1871-1872) (XVIII + 1116 pp.)

- Gurudeva, Magadi R., *Botanical and Vernacular Names of South Indian Plants*, Divyachandra Prakashana, Bangalore, 2001, 1000 pp.
- Hava J.H., *Arabic-English Dictionary*, Catholic Press, Beirut 1951, (VII + 915 pp.)
- Heinrich F.J. Junker and Bozorg Alavi, *Persisch-Deutsches Wörterbuch*, Max Hueber Verlag, München, (1968, XIV + 864 pp.)
- Kavali, C.E., *Sacitra Kannaḍa-Kannaḍa Kastūri Kōṣa*, Rāmāśraya Buk Dipo, Dhārawāḍa, (3rd print,) 1971, (XVI + 964 pp.)
- Kittel, F., *Kannaḍa English Dictionary*, Basel Mission Book & Tract Depository, Basel, 1893 (L + 1752 pp.)
- Kulkarni, K.P., *Marathi Etymological Dictionary, [Historical & Comparative]*, Shri Lekhan Wachan Bhandar, Poona, 1964, (8 + 829 pp.)
- Mariappa Bhatt, M. (Ed.), *Kittel's Kannada-English dictionary*, Revised and enlarged, in 4 vols., University of Madras, 1968.
- Mayrhofer, M., *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*, (4 vols.), Carl Winter, Heidelberg, 1956-1980.
- McGregor, R.S., *The Oxford Hindi-English Dictionary*, Oxford University Press, Oxford, Delhi, 1993, (xxx + 1083 pp.)
- Molesworth, H.T., *A Dictionary Marāṭhi and English*, (2nd edition) Bombay Education Society's Press, Bombay, 1857, (xxx + 920 pp.)
- Prater, S.H., *The Book of Indian Animals*, Bombay Natural History Society, Bombay, Delhi, Calcutta, Madras, 1971, (xxii + 324 pp.)
- Reeve, W., *Dictionary Kannada and English*, (revised, corrected and enlarged by Daniel Sanderson), Asian Educational Services, New Delhi, 1980, (first published, 1858)
- Richard Pischel, *Grammatik der Prakrit-Sprachen, Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde*, 1 Band, 8 Heft, Karl J. Trübner, Strassburg 1900, repr. Hueber Verlag, München, 1968, (XIV + 864 pp.)
- Subramanian, P.R., *Kriyāviṇī taṛkālat Tamil Akarāti: Tamil-Tamil-Āṅkilam*, Kriyā (Cre-A), 1992, (xxxvi + 979 pp.)
- Venkatasubbaiah, G. (Ed.), *Kannaḍa Sāhitya Pariṣattina Nighaṇṭu*, in 8 vols., Kannaḍa Sāhitya Pariṣattu, 1970-1995.
- Various Authors, *Tamil Lexicon*, University of Madras, 7 vols. + Supplement, University of Madras, 1982.

3. カンナダ文字の字母表

3.1 母音字母(16)

ಅ	ಆ	ಇ	ಈ	ಉ	ಊ	ಋ	ೠ*	ಎ	ಏ	ಐ	ಒ	ಓ	ಔ	ಂ [†]	ಃ [†]
a	ā	i	ī	u	ū	r̥	r̄*	e	ē	ai	o	ō	au	ṁ [†]	ḥ [†]
ア	アー	イ	イー	ウ	ウー	ル	ルー	エ	エー	アイ	オ	オー	アウ	ン	ッ

* ೠは文字としてはあるが、実際の文には出現しない。

[†] ಂとಃは、語頭には出現しないので、本辞典の見出し項目に立っていない。

3.2 子音字母(36)

ಕ	ಖ	ಗ	ಘ	ಙ
ka	k ^h a	ga	g ^h a	ṅa
カ	カ	ガ	ガ	ナ
ಚ	ಛ	ಜ	ಝ	ಞ
ca	c ^h a	ja	j ^h a	ṅa
チャ	チャ	ジャ	ジャ	ニャ
ಟ	ಠ	ಡ	ಢ	ಣ
ṭa	ṭ ^h a	ḍa	ḍ ^h a	ṇa
タ	タ	ダ	ダ	ナ
ತ	ಥ	ದ	ಧ	ನ
ta	t ^h a	da	d ^h a	na
タ	タ	ダ	ダ	ナ
ಪ	ಫ	ಬ	ಭ	ಮ
pa	p ^h a	ba	b ^h a	ma
パ	パ	バ	バ	マ
ಯ	ರ	ಲ	ವ	
ya	ra	la	va	
ヤ	ラ	ラ	ヴァ	
ಶ	ಷ	ಸ	ಹ	
śa	ṣa	sa	ha	
シャ	シャ	サ	ハ	
ಳ	ಱ	ಱ		
ḷa	ṛa	ṛa		
ラ	ラ	ラ		

3.3 子音字母+母音字母(16×36 = 576)

ಕ	ಕಾ	ಕಿ	ಕೀ	ಕು	ಕೂ	ಕೃ	ಕೃ	ಕೆ	ಕೇ	ಕೈ	ಕೊ	ಕೋ	ಕೌ	ಕಂ	ಕಃ
ka	kā	ki	kī	ku	kū	kr̥	kr̄	ke	kē	kai	ko	kō	kau	kaṁ	kaḥ
ಖ	ಖಾ	ಖಿ	ಖೀ	ಖು	ಖೂ	ಖೃ	ಖೃ	ಖೆ	ಖೇ	ಖೈ	ಖೊ	ಖೋ	ಖೌ	ಖಂ	ಖಃ
k ^h a	k ^h ā	k ^h i	k ^h ī	k ^h u	k ^h ū	k ^h r̥	k ^h r̄	k ^h e	k ^h ē	k ^h ai	k ^h o	k ^h ō	k ^h au	k ^h aṁ	k ^h aḥ
ಗ	ಗಾ	ಗಿ	ಗೀ	ಗು	ಗೂ	ಗೃ	ಗೃ	ಗೆ	ಗೇ	ಗೈ	ಗೊ	ಗೋ	ಗೌ	ಗಂ	ಗಃ
ga	gā	gi	gī	gu	gū	gr̥	gr̄	ge	gē	gai	go	gō	gau	gaṁ	gaḥ

ಘ	ಘಾ	ಘಿ	ಘೀ	ಘು	ಘೂ	ಘ್ರ	ಘ್ರ್	ಘೆ	ಘೇ	ಘೈ	ಘೊ	ಘೋ	ಘೌ	ಘಂ	ಘಃ
gha	ghā	ghī	ghī	ghu	ghū	ghṛ	ghṛ	ghe	ghē	ghai	gho	ghō	ghau	gham	ghah
ಙ	ಙಾ	ಙಿ	ಙೀ	ಙು	ಙೂ	ಙ್ರ	ಙ್ರ್	ಙೆ	ಙೇ	ಙೈ	ಙೊ	ಙೋ	ಙೌ	ಙಂ	ಙಃ
ṅa	ṅā	ṅī	ṅī	ṅu	ṅū	ṅṛ	ṅṛ	ṅe	ṅē	ṅai	ṅo	ṅō	ṅau	ṅam	ṅah
ಚ	ಚಾ	ಚಿ	ಚೀ	ಚು	ಚೂ	ಚ್ರ	ಚ್ರ್	ಚೆ	ಚೇ	ಚೈ	ಚೊ	ಚೋ	ಚೌ	ಚಂ	ಚಃ
ca	cā	ci	cī	cu	cū	cṛ	cṛ	ce	cē	cai	co	cō	cau	cam	caḥ
ಛ	ಛಾ	ಛಿ	ಛೀ	ಛು	ಛೂ	ಛ್ರ	ಛ್ರ್	ಛೆ	ಛೇ	ಛೈ	ಛೊ	ಛೋ	ಛೌ	ಛಂ	ಛಃ
cha	chā	chi	chī	chu	chū	chṛ	chṛ	che	chē	chai	cho	chō	chau	cham	chah
ಜ	ಜಾ	ಜಿ	ಜೀ	ಜು	ಜೂ	ಜ್ರ	ಜ್ರ್	ಜೆ	ಜೇ	ಜೈ	ಜೊ	ಜೋ	ಜೌ	ಜಂ	ಜಃ
ja	jā	ji	jī	ju	jū	jṛ	jṛ	je	jē	jai	jo	jō	jau	jam	jah
ಝ	ಝಾ	ಝಿ	ಝೀ	ಝು	ಝೂ	ಝ್ರ	ಝ್ರ್	ಝೆ	ಝೇ	ಝೈ	ಝೊ	ಝೋ	ಝೌ	ಝಂ	ಝಃ
ḥa	ḥā	ḥi	ḥī	ḥu	ḥū	ḥṛ	ḥṛ	ḥe	ḥē	ḥai	ḥo	ḥō	ḥau	ḥam	ḥah
ಞ	ಞಾ	ಞಿ	ಞೀ	ಞು	ಞೂ	ಞ್ರ	ಞ್ರ್	ಞೆ	ಞೇ	ಞೈ	ಞೊ	ಞೋ	ಞೌ	ಞಂ	ಞಃ
ña	ñā	ñi	ñī	ñu	ñū	ñṛ	ñṛ	ñe	ñē	ñai	ño	ñō	ñau	ñam	ñaḥ
ಟ	ಟಾ	ಟಿ	ಟೀ	ಟು	ಟೂ	ಟ್ರ	ಟ್ರ್	ಟೆ	ಟೇ	ಟೈ	ಟೊ	ಟೋ	ಟೌ	ಟಂ	ಟಃ
ṭa	ṭā	ṭi	ṭī	ṭu	ṭū	ṭṛ	ṭṛ	ṭe	ṭē	ṭai	ṭo	ṭō	ṭau	ṭam	ṭah
ಠ	ಠಾ	ಠಿ	ಠೀ	ಠು	ಠೂ	ಠ್ರ	ಠ್ರ್	ಠೆ	ಠೇ	ಠೈ	ಠೊ	ಠೋ	ಠೌ	ಠಂ	ಠಃ
ṭha	ṭhā	ṭhi	ṭhī	ṭhu	ṭhū	ṭhṛ	ṭhṛ	ṭhe	ṭhē	ṭhai	ṭho	ṭhō	ṭhau	ṭham	ṭhaḥ
ಡ	ಡಾ	ಡಿ	ಡೀ	ಡು	ಡೂ	ಡ್ರ	ಡ್ರ್	ಡೆ	ಡೇ	ಡೈ	ಡೊ	ಡೋ	ಡೌ	ಡಂ	ಡಃ
ḍa	ḍā	ḍi	ḍī	ḍu	ḍū	ḍṛ	ḍṛ	ḍe	ḍē	ḍai	ḍo	ḍō	ḍau	ḍam	ḍah
ಢ	ಢಾ	ಢಿ	ಢೀ	ಢು	ಢೂ	ಢ್ರ	ಢ್ರ್	ಢೆ	ಢೇ	ಢೈ	ಢೊ	ಢೋ	ಢೌ	ಢಂ	ಢಃ
ḍha	ḍhā	ḍhi	ḍhī	ḍhu	ḍhū	ḍhṛ	ḍhṛ	ḍhe	ḍhē	ḍhai	ḍho	ḍhō	ḍhau	ḍham	ḍhaḥ
ಣ	ಣಾ	ಣಿ	ಣೀ	ಣು	ಣೂ	ಣ್ರ	ಣ್ರ್	ಣೆ	ಣೇ	ಣೈ	ಣೊ	ಣೋ	ಣೌ	ಣಂ	ಣಃ
ṇa	ṇā	ṇi	ṇī	ṇu	ṇū	ṇṛ	ṇṛ	ṇe	ṇē	ṇai	ṇo	ṇō	ṇau	ṇam	ṇah
ತ	ತಾ	ತಿ	ತೀ	ತು	ತೂ	ತ್ರ	ತ್ರ್	ತೆ	ತೇ	ತೈ	ತೊ	ತೋ	ತೌ	ತಂ	ತಃ
ta	tā	ti	tī	tu	tū	tṛ	tṛ	te	tē	tai	to	tō	tau	tam	taḥ
ಥ	ಥಾ	ಥಿ	ಥೀ	ಥು	ಥೂ	ಥ್ರ	ಥ್ರ್	ಥೆ	ಥೇ	ಥೈ	ಥೊ	ಥೋ	ಥೌ	ಥಂ	ಥಃ
ṭha	ṭhā	ṭhi	ṭhī	ṭhu	ṭhū	ṭhṛ	ṭhṛ	ṭhe	ṭhē	ṭhai	ṭho	ṭhō	ṭhau	ṭham	ṭhaḥ
ದ	ದಾ	ದಿ	ದೀ	ದು	ದೂ	ದ್ರ	ದ್ರ್	ದೆ	ದೇ	ದೈ	ದೊ	ದೋ	ದೌ	ದಂ	ದಃ
da	dā	di	dī	du	dū	dṛ	dṛ	de	dē	dai	do	dō	dau	dam	daḥ
ಧ	ಧಾ	ಧಿ	ಧೀ	ಧು	ಧೂ	ಧ್ರ	ಧ್ರ್	ಧೆ	ಧೇ	ಧೈ	ಧೊ	ಧೋ	ಧೌ	ಧಂ	ಧಃ
ḍha	ḍhā	ḍhi	ḍhī	ḍhu	ḍhū	ḍhṛ	ḍhṛ	ḍhe	ḍhē	ḍhai	ḍho	ḍhō	ḍhau	ḍham	ḍhaḥ
ನ	ನಾ	ನಿ	ನೀ	ನು	ನೂ	ನ್ರ	ನ್ರ್	ನೆ	ನೇ	ನೈ	ನೊ	ನೋ	ನೌ	ನಂ	ನಃ
na	nā	ni	nī	nu	nū	nṛ	nṛ	ne	nē	nai	no	nō	nau	nam	naḥ
ಪ	ಪಾ	ಪಿ	ಪೀ	ಪು	ಪೂ	ಪ್ರ	ಪ್ರ್	ಪೆ	ಪೇ	ಪೈ	ಪೊ	ಪೋ	ಪೌ	ಪಂ	ಪಃ
pa	pā	pi	pī	pu	pū	pṛ	pṛ	pe	pē	pai	po	pō	pau	pam	paḥ
ಫ	ಫಾ	ಫಿ	ಫೀ	ಫು	ಫೂ	ಫ್ರ	ಫ್ರ್	ಫೆ	ಫೇ	ಫೈ	ಫೊ	ಫೋ	ಫೌ	ಫಂ	ಫಃ
pha	phā	phi	phī	phu	phū	phṛ	phṛ	phe	phē	phai	pho	phō	phau	pham	phaḥ
ಬ	ಬಾ	ಬಿ	ಬೀ	ಬು	ಬೂ	ಬ್ರ	ಬ್ರ್	ಬೆ	ಬೇ	ಬೈ	ಬೊ	ಬೋ	ಬೌ	ಬಂ	ಬಃ
ba	bā	bi	bī	bu	bū	bṛ	bṛ	be	bē	bai	bo	bō	bau	bam	baḥ
ಭ	ಭಾ	ಭಿ	ಭೀ	ಭು	ಭೂ	ಭ್ರ	ಭ್ರ್	ಭೆ	ಭೇ	ಭೈ	ಭೊ	ಭೋ	ಭೌ	ಭಂ	ಭಃ
bha	bhā	bhi	bhī	bhu	bhū	bhṛ	bhṛ	bhe	bhē	bhai	bho	bhō	bhau	bham	bhaḥ

3.5 arkavottu(アルカヴォットウ)と halant(ハラント)

子音 *r* が子音結合の最初の要素であるときには、デーヴァナーガリー文字における repha の形と同様に、arkavottuと呼ばれる特別な形 ऌ をとって子音結合の最後に来る。例えば、 तर्क という形で *tarka* を表す。

文字に潜在的に含まれている母音が発音されないことを示す記号は、インド系文字一般でハラントと呼ばれ、 ँ という形が文字に付加される。例えば、 $k = \text{कँ}$, $t = \text{तँ}$ など。

3.6 数字

現代ではあまり用いられないが、カンナダ文字の数字は以下のものである。

೧	೨	೩	೪	೫	೬	೭	೮	೯	೦
1	2	3	4	5	6	7	8	9	0

